内藤湖南の世界を新たな視角で切り開く

小林義廣

高木智見著
内藤湖南
近代人文学の原点

四六判　400頁
筑摩書房
［本体3300円＋税］

内藤湖南（一八六六～一九三四）の死去から八〇年以上も経過するのに、この日本と中国に関する多大な知的業績を残した、いわば知の巨人は、今でも注目されつづけている。本書でも、その例証として、中国人研究者を中心にして、内藤湖南に関わる近年の著作を紹介しているけれども（一六・一七頁）、ここ数年内を見ても、『支那論』（『新支那論』も含む）が文春文庫として（二〇一三年）、『中国近世史』が岩波文庫本として（二〇一五年）刊行されたことを挙げれば、その注目度は充分に理解できよう。その上、『日本文化史研究』（講談社文庫、一九七六年）が版を重ねて、今でも店頭に並んでおり、内藤湖南の著作は一種の古典としての地位を確立しているといえようか。

本書は、このように長年に亙って注目されている内藤湖南に対して、今でも生命力を持ち続けているのはどうしてか、それと関わって、なぜ内藤湖南は面白いのかという、まさに愚直としか言い様のない問いを真っ正面から掲げて、それに著者なりの解答を求めて、対象に真っ向から立ち向かっている。その対象との切り結び方と著者の真摯な姿勢とが、本書を読む者に緊張感を与え、知的な感動と興奮を呼び起こすように思われる。それ故に、そうした性格を有する本書の、著者の思考回路と息遣いを、限られた紙幅で伝えることは、評者の能力を遙かに凌駕している。ここでは、飽くまで評者なりの読み方を提示するという点を予め断っておきたい。

本書は、序章と終章を前後に挟み、その間に六つの章が配される、つまり全部で八章から構成されている。各章の梗概は著者自身が序章の中で、本書の凡例とともに記しているが、

拙文の、紹介文という事柄の必要上から、まず極く簡単に内容に触れておこう。序章は、湖南の実像に迫り、その全体像を捉える必要から、「湖南の世界に入りこみ、湖南を内側から観察する」ことを目標とし、そのため湖南の学問と思想の核心に位置する歴史学と儒学思想に着目すると述べて、本書全体の方向性を打ち出している。その上に立って、湖南研究の現状や、湖南の学問観が現在も生命力を持っていることを確認し、本書の狙いと各章の概要とに筆を進めている。第一章は、湖南が若年に多く執筆した『大同新報』巻頭の文章（社説）を分析の対象としながら、湖南の早期の文章にも、その後の中国学者としての片鱗が表れていると指摘し、更には激烈ともいうべき彼の文章の背後にある思想を探る必要性に言及して次章に繋げている。なお、本章は、『内藤湖南全集』に載っていない『大同新報』の記事をも、多く分析の対象としている。第二章は、若年の湖南の激越な文章は、「修己治人（己を修めて人を治む）」という儒家思想に由来し、そうした理念に純粋な気持ちで立ち向かう姿勢（一種の豪傑）は孟子の思想に基づいており、しかもこうした直截な思想は、福沢諭吉や内村鑑三といった人びとをも含む幕末維新時期の人士に共通していたと主張する。第三章と第四章は、著者が本書の最初に問題提起した、なぜ湖南は面白いのかという設問に対する考察とその解答であり、それを歴史認識の側面から（第三章）と、歴史叙述の側面から（第四章）明らかにしようとしている。第三章は、歴史を変化の相から認識しようとする湖南は、中国史を古代から現代までの通史として捉える志向性を有し、そこには『史記』に通ずる歴史意識や、万物を変化流転する無常観を宗旨とする仏教思想の影響を見出せると指摘する。仏教は、著者によると、湖南が若年に沈潜した思想であった。第四章は、分量として本書で一番多く、それだけに論点も多岐に亙っているが、著者は多量の言葉を費やして、湖南が中国及び日本の過去における優れた学者の著作を精読して、自らの方法論を鍛えていたことを確認している。そして、それらの獲得された方法論を使って、事象を当事者の目線に立って共感的に認識するとともに、冷徹な目で眺める姿勢を堅持し（「眼は冷たく心は熱く」二五五頁）、その上に立って、時代を象徴する人物や事象を選択して、歴史的特質を読者の眼前にイメージできるような叙述を志していたという。第五章は、『支那論』自序の、「支那人に代つて支那の為めに考へる」という著名な語句を手掛かりにして、「湖南が中国というテキストに対して、いかなる立場で、どのように読み解こうとしていたのか」を考えようとしたものである。この言葉は、従前、しばしば湖南の侵略的発想を端的に

示す語句として斬罪されてきたが、[1] 著者は、これをテキストの完全な理解は作者や当事者の立場に立って理解する、いわば「心知」によって達成されるという意味だと捉え直している。そして、湖南に代表されるように、かつての東アジア文化圏では、この「心知」による相互理解が日本と中国という空間や、過去・現在・未来という時間をも超えて存在していたと結論づける。第四章と第五章は、湖南の認識方法と、それを如何に身に着けたかを丹念に追究しており、著者が力点を置いた本書の白眉ともいえる箇所といえよう。第六章は、令夫人の高木尚子氏との共作部分であり、『内藤湖南全集』巻一四に載る湖南の著作目録に対する疑念から出発して、湖南の執筆文に対する史料的検討を企てている。つまり、当該の著作目録は、全集に収録する根拠や基準が説明し尽くされておらず、そうだとすれば若年時代に多い無署名の文章を湖南のものだと判定するには、どうしたら良いかという問題が当然に起こってくるという。本章は、そうした判断の基準として湖南が父親に宛てた書簡に依拠すべきことと、[2] 湖南に対する内在的理解によって、いわば「心知」する以外にはないと結論づける。終章は、この書物が拘り続けてきた湖南の面白さの意味を、もう一度考察の俎上に載せている。それによると、湖南の文章の面白さは、湖南がその誠意を尽くし、恕（「心知」の言い換え）の精神を発揮し、しかも「恕」という言葉が儒家思想の眼目であるように、「湖南が儒家思想を処世の基盤に置き、それを文筆活動において実践していたことに由来する」（三七八頁）と結論づける。そして、最後に湖南は「常により高い理想を追求し、実現へ向けての努力を絶えず継続する、それが湖南の学問であり、人生であった」。これこそが、湖南から学ぶべき最も肝心な一点であると本書を締めくくっている（三八三頁）。

以上の、拙く不充分な紹介からも、本書の特色は次のようであると理解できよう。つまり、著者は、何故に内藤湖南が面白いのかという設問をして（面白くないという想定は全くなされない、あるいは想定外）、その答えを求めて、研究者自身の価値観に基づく外側からではなく、正に内側から観察して、その全体像と本質を果敢に捉えようとしたのだ、と。その取り組み姿勢は、著者自身も執筆している『内藤湖南の世界――アジア再生の思想』（河合文化教育研究所、二〇〇一年、著者の執筆論文は本書の第三章となっている）の中において、その編者であり、著者の恩師でもある谷川道雄氏が提示した、湖南の思想をできるだけありのままに捕捉し（七頁）、その心情に沿って読み、湖南の内在的理解を企図するという方向性を（三八四頁）継承したといえよう。著者は、そのために湖

南の文章が踏まえている古典を丹念に当たって、湖南の意図を正確に捉えようと努力している。それというのも、湖南の文章を一度でも読んだ人間ならば知っているように、とりわけ湖南の若年の文章は難解であり、その難解さの原因は、難渋な論理展開にあるだけではなく、もう一つは現代人の多くが喪失してしまった中国古典の知識を豊富に駆馳した文章だからである（後年の、とくに講演や講義に基づく文章は、比較的分かりやすい）。しかも、明治期の文章は、湖南に限らないが、語彙が現在の意味と異なっている場合もあり、それを知らないと、思わぬ誤解の陥穽にはまってしまうのである。たとえば、湖南の最初の著書『近世文学史論』（全集巻一に所収）は、江戸期の儒学を中心として国学や医学など、広い意味の学問を論じたものであるが、その内容に端的に示されているように、表題の「文学」は、現代とは異なる伝統的な用法であり、現代でいえば学問・学術といった意味に近い。このように、湖南を読む場合、何よりも、当時の文脈に即して、ありのままに、心情に寄り添った理解を前提としなければならないのである。かつて、『内藤湖南の世界』のそうした立場の表明を、「研究の名に値しない」と断罪したある論文が、結果的に湖南の正確な文章理解を欠いた無惨な内容であったことを思えば、著者の立場は頂門の一針の役割を果たしているとともに、湖南の内側からの理解が稔り豊かな成果を生んだ例証だと言って良いのではなかろうか。その意味で、本書は、少なくとも、今後の湖南研究を進めるとき、必ず踏まえねばならない著作物となったといえよう。無論、本書にも若干の校正ミスや論理の飛躍などの問題点はあるけれども、それらは論旨全体には関わらない小さな瑕疵であると評者には思えるので、判断は本書を繙く読者に委ねたい。

ところで、念のために誤解の無いように、一言付け加えておくならば、探求対象を自己の研究姿勢と関わらせながら、対象の内側から理解しようとする著者の姿勢は、単なる谷川道雄氏の志向を受け継いだというだけではなく、そもそも著者自身が学生時代からもち続けた研究姿勢であるという点である。[3] その客観的成果の一つが、専攻する春秋時代の史料に沈潜した結果として、著者は当時の諸侯国が、単なる現世の人間だけでなく、常に祖先神と現存人間との両者で構成される「神人共同体」であったという理解を提示した点に端的にみられよう（「春秋時代の聘礼について」『東洋史研究』四七―四、一九八九年、「春秋時代の神・人共同体」『中国――社会と文化』五、一九九〇年）。

最後に、注（2）にも触れたが、湖南研究をめぐって、現在は全集のみではなく、湖南の父親宛の書簡集も発刊され、

そして本書の序章にもあるように、敦煌調査に関わる記録集（『内藤湖南敦煌遺書調査記録』関西大学東西学術研究所、二〇一五年）や、日中の文人と応酬した漢詩（銭婉約・陶徳民『内藤湖南漢詩酬唱墨迹輯釈』国家図書館出版社、二〇一六年）などの資料集が陸続と出版されている。更には、湖南の操觚（そうこ）時代を中心として全集未収録の文章の編纂作業も、かつて著者も所属していた内藤湖南研究会によって進められ、ここ一年内には出版される予定となっている。このように内藤湖南の研究をめぐる資料環境は、以前と比べれば格段と改善されつつある。そうした状況下での、今回の内藤湖南論である。正直に言って、本書は読むのに多少骨が折れるが、それだけに読み応えがあり、今後の湖南研究を占う意味からも是非とも一読を勧めたい書物である。

注

（1）著者は、子安宣邦氏の「人はここに植民地経営にあたる本国知識人による対植民地の認識視点に類似するものを容易に見出すであろう」（「支那学の成立」『現代思想』一九九三年七号）を挙げているが、子安氏は更に踏み込んで、「それは日本帝国大学の〈支那学者〉湖南による現代中国への認識論的な干渉あるいは介入ではないか」とも語っている（子安宣邦『日本人は中国をどう語ってきたか』青土社、二〇一二年、五一頁）。

（2）『全集』巻一四にも父親宛の書簡が載っているが、それでは不充分であった。その点、最近、出身地の秋田県鹿角市の教育委員会から『内藤湖南・十湾書簡集』（二〇一六年）が発刊されて多大な便宜を与えている。

（3）著者は、学生時代、自分の研究姿勢を、自分の人間としての課題と結びつけて、それを歴史対象と切り結ぶ必要性を力説している（「高木君の放談」『縁渓原道録――谷川教室在金城記』名古屋大学文学部東洋史学研究室、一九七九年、所収）。

（こばやし・よしひろ　東海大学）